

## 第459空輸中隊、日米友好祭で飛行展示を行う 459 AS showcases CAPEX during Friendship Festival

September 19, 2018

By Yasuo Osakabe  
374th Airlift Wing Public Affairs

横田基地第459空輸中隊は、9月15・16日に開催された2018年日米友好祭の航空機飛行展示(実践力訓練)で、同中隊の運用および乗員と航空機の連携による任務について理解を深めてもらうため、来場した約14万5000人にUH-1の任務の一部を披露した。

「UH-1の能力を観衆に披露できることを嬉しく思う。日本ではそれほど頻繁に救助作戦を実施する機会は少ないが、我々にはその準備がある。ヘリで行える任務や横田基地で日々行っている訓練を人々に見てもらえる機会だ」と、航空機飛行展示の調整官で第459空輸中隊UH-1Nパイロットおよびスケジューラーのエマーソン・ウォーナー大尉は述べた。

飛行展示は、観衆を楽しませた一方、地元の人々との関係を築く重要なプラス効果をもたらした。

「横田基地の上空を毎日飛んでいるが、我々が日々行っていることを地域の人々に知ってもらう機会はあまりない。(日米友好祭での飛行展示は)地元の人々や他の来場者に我々の日々の任務を知ってもらうよい機会だ」とウォーナー大尉は述べた。

捜索・救助能力を披露した飛行展示は、第374運用群の空兵によるチームワークの結晶だ。シナリオに基づき、第374運用支援中隊に所属する生存・回避・抵抗・脱走(SERE)専門官が、模擬負傷者の捜索・救助活動を行った。UH-1が着地できない場所での救助活動を想定に、乗員たちはホイストや他の救助機材を用いて負傷者とSERE専門官を安全にヘリに釣り上げた。彼らが無事ヘリに釣り上げられると、模擬負傷者は医療搬送された。

日米友好祭の会場から大勢の観衆が、飛行展示を通じてインド太平洋地域における運用や有事に支援するためにUH-1の乗員たちがこれまでにやってきた数えきれないほどの練習や訓練の成果を目にした。

「来場者に我々の飛行展示(実践力訓練)を楽しんでもらい、UH-1の能力についてより理解を深めてもらえたことを願っている」とウォーナー大尉は述べた。

